



## タンチョウ博士のお話（第14回）

### ○タンチョウは1年をどう過ごすか

今、この文を読み始めたあなたは、1年をどのように過ごしているだろう？

学生なら毎日の定時の通学と、期末試験に苦勞する1年だし、新入社員は新しい環境に苦勞しながら、ときには気の合う仲間と遊んで気分転換！

中年夫婦は、子育てと仕事で年中忙しいし、老夫婦の農業者なら、後継者不足を憂いつつも、季節に応じた穏やかな日々……。

つまり、ヒトと一口に言っても、個人や年齢・状況により1年の暮らしはずいぶん違う。タンチョウも同じだ。しかも、同じ年代や境遇のヒトの暮らしが似ているように、1歳のツルは1歳の、夫婦のツルは夫婦の、それぞれ特有の時間を過ごす。

その全部を詳しく述べるわけにはいかないが、「成鳥の番い」と「若鳥」を取り上げて、その1年の暮らしをかいつまんでみておこう。

まず番い。彼らは決まった場所に2km<sup>2</sup>前後（ちょうど舞鶴遊水地の広さ）の領地（なわばり）を構える。しかし、普通、そこは早春から晩秋までしか使わない。3月頃やってきて、4月半ばに直径と厚さが棧俵（さんだわら米俵の蓋、すでに死語？）の4～5倍ほどの巣をヨシで地上に造り、卵を2つ生む。卵を夜は母親が、昼間は父親と交代で抱くこと約1か月。巣の色に似た（保護色）、ニワトリのひよこみたいなヒナは、生まれて4～5日で巣を離れ、よちよちと親について歩く。その後巣へは戻らず野宿、のじゆくと言っても、生まれて2か月ほどは、夜は地面に座った母親に抱かれて眠る。

父母双方から餌をもらい、仔は生後100日ほどで飛べるようになる。山に初雪が来る頃に家族は領地を離れ、数キロ～数百キロ離れた餌のある、主に釧路管内の越冬地へ移る。積雪期を家族で一緒に過ごし、2～3月に親は仔を追い払い、また繁殖地へと戻っていく。

他方、独立した仔は、単独か、若者仲間と小さな群れで、春から秋は番いの領地の間を縫うように広くあちこち動き回り、数年かけて自分（主にオス）が住む領地を探す。この間、冬は越冬地へ戻り、気の合う異性を見つけて番いとなる。新たな領地で新生活を始めるのは、生まれて3年以上経てからだ。

これが、おおざっぱにみたツルの暮らしだが、年齢や個々のツルでさまざまな違いがある。例えば、卵を産んでも孵かえらない（不妊）、雪解け水で巣が流される（天災）、折角のヒナをキツネにやられる（事件）、家族で飛行中に仔が電線衝突で死亡（事故）などで、仔なし夫婦ができるし、離婚もあれば再婚もよく起きる。

婚活中の若者も、昨日までの元彼を無視して新しい彼と一緒に飛んだり、かなりの歳になるまで独身を貫いたり、と多様な暮らしぶりだ。

つまり、同じ1年の生活と言っても、暮らしの大筋の流れの中で、個々のツルにより、まさにヒトと同じように、個性のある異なった暮らしぶりがあることを、私たちヒトも知っておくべきだ。

（文・写真：正富宏之）

※今年度の「タンチョウ博士のお話」は隔月での連載となります。



春



初夏



右から2、4番目は幼鳥

秋



冬